

SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」

— 担当教員のゼミナールと連動した 2022 年度プロジェクトを中心に —

池村明生*1・藤吉正明*2・万城目正雄*3・吉村維元*4・貴家勝宏*5

1. はじめに
2. 2022 年度の授業概要
3. 2022 年度の実施プロジェクト
— 担当教員のゼミナールと連動したプロジェクト —
4. おわりに

1. はじめに

2022 年度の SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、前年度の体制を遵守しながら春学期から秋学期にかけて通年を通じて開講した。春学期はオムニバス形式の座学「人間学 1」を 2 年次生中心に、また秋学期は担当教員ごとに行うゼミナール形式の実践授業「人間学 2」を 3 年次生中心に実施した。

授業形態として「人間学 1」は、当初、大学が設定したガイドラインにより“ブレンド型面接”（14 回のうち 7 回までは遠隔可）として計画としたが、本授業は学部共通授業で 1 科目に多くの履修者が集中することが見込まれるため、全授業を遠隔開講したいとの要望書を提出して変更した。また「人間学 2」については全履修学生が参加する月 1 回の報告を兼ねたコア授業（全 4 回開催）については遠隔開講し、それ以外の担当教員のゼミナールと連動する授業は面接を基本に開講した。いずれにしても 2020 年から続く新型コロナウイルス感染症の影響も収まらない中でのやりくりは続いた。

また 2022 年度からスタートした教養学部の改組改編による新学科体制の中、「人間学 1」「人間学 2」は 2021 年度以前の入学者に提供する授業となることで、担当教員は新たなカリキュラムにも対応しながら、旧カリキュラムとして進めることになった。担当教員は昨年度に引き続き、「人間学 1」は 3 学科（人間環境学科／芸術学科／国際学科）から 5 名の教員が担当した。また「人間学 2」はその内の 4 名が各教員のゼミナールと連動させながら、実践型教育プロジェクトとして進められた。

2. 2022 年度の授業概要

「人間学 1」は春学期の水曜 1 限で「地域ブランド創造」を共通テーマに、5 名の教員が Microsoft Teams を使った遠隔授業によりオムニバス形式で講義系授業を担当した。代表教員である池村が「地域ブランド」をテーマに 3 コマ、藤吉が「湘南の自然」をテーマに 3 コマ、吉村が「創造とアート」をテーマに 2 コマ、万城目が「地域マーケティング」をテーマに 3 コマ、貴家が「地域産業と戦略」をテーマに 3 コマを担当し、合計 14 コマで授業が進められた。履修生は 2 年次生を中心に延べ 173 名であり、「人間学 1」の他の開講プロジェクトが減る中、学部の学年総数の約半分もの履修人数となり過去最高の履修者数となった。

また「人間学 2」は昨年度同様に秋学期に開講し、池村・藤吉・万城目・貴家の 4 名がそれぞれの学科課程において開講するゼミナールと連動するかたちで進められた。池村は履修生 17 名にデザインを通じた様々な地域連携プロジェクトを推進。藤吉は履修生 12 名に秦野地区における樹木プレートづくりや巣箱設置プロジェクトを進め、万城目は履修生 15 名に湘南地域のみかん狩りサポートとみかんの活用計画などを展開した。また貴家は履修

投稿日 2024 年 1 月 31 日 受理日 2024 年 1 月 31 日

*1 芸術学科教授 *2 人間環境学科教授 *3 人間環境学科教授 *4 芸術学科教授 *5 国際学科教授

生 9 名に学生対象のビジネスコンテストを題材に進めた。よって「人間学 2」の履修生は 3 年次生を中心に延べ 53 名になった。またそれぞれのプロジェクトの進捗や経過、目的や成果については、吉村を含めた担当教員 5 名と全履修生が参加する月 1 回（延べ 4 回／火曜 5 限開催）の遠隔授業を開催して、それぞれ担当した学生たちから報告してもらった。

3. 2022 年度の実施プロジェクトー担当教員のゼミナールと連動したプロジェクトー

「人間学 2」で進められた実践型教育プロジェクトは、担当教員のゼミナールと連動するかたちで以下のように実施された。

3-1 藤吉ゼミナールのプロジェクト

藤吉ゼミナールでは、人と自然のかかわりを考える教育・研究活動を進めており、本科目ではその一環として衣・食・住・遊という視点で環境保全と絡めた活動を展開することを目的とした。本年度のプロジェクトについては、野生哺乳類の「住環境」に着目し、湘南地域の雑木林に生息するムササビの生活環境対策（巣箱作り）とその雑木林の木々の紹介（樹木プレート作り）を行うことで、野生生物保全活動（ムササビの森づくりプロジェクト）を実施した。

①プロジェクトの概要

湘南地域の雑木林には、樹上性の哺乳類としてムササビが生息しているが、生息環境の悪化、主にねぐらとなる樹洞の減少により年々個体数が低下している状況である。その生息環境を少しでも改善するために、ムササビのねぐらや繁殖のための巣箱を作るとともに、ムササビの生息する森の樹木を紹介するために樹木プレートの設置を行った。実施場所は、湘南キャンパスから直線距離で 2 km ほど北に位置する秦野市弘法山公園内の雑木林とした。環境保全の観点から巣箱や樹木プレートの材料には、秦野市産の針葉樹であるヒノキ間伐材を材料として、製作を実施した。

②プロジェクトの経過

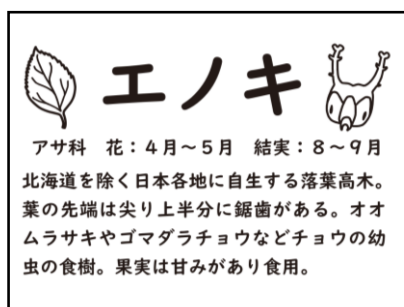
2022 年 10 月に、秦野市森林組合からヒノキ間伐材を入手し、湘南キャンパス 10 号館の実験室内で巣箱作りを進めた。樹木プレートについては、樹木の説明のための文章とその樹木に関する葉や動物のスケッチを取り入れ、オリジナルの樹木プレートを作製した。樹木プレートの原稿をパソコンで完成させた後、教養学部芸術学科のレーザー加工機を使用して、間伐材プレートに印字した。レーザー加工機使用については、カレッジ職員の桑原さんにご協力いただいた。

③プロジェクトの成果

プロジェクト活動を通して、大きさの異なる 4 つの巣箱を完成させた。完成後、ゼミで管理している雑木林に 2023 年 2 月に巣箱を設置した。設置については、安全面の配慮から、クライミングを行っているゼミ卒業に協力してもらい、樹上 5m から 10m の範囲に複数設置した。また、樹木プレートについては、雑木林に生育する 15 種（クヌギ、エノキ、コナラ、マユミ、ミズキ、ゴンズイ、ムラサキシキブなど）の樹木プレートを作製し、高さ 120 cm 付近の幹や枝に取り付けた。今後、設置した巣箱がムササビに利用されるのかどうかを明らかにするため、定期的な観察が必要とされている。2023 年 9 月現在、設置した巣箱でムササビ 1 個体が確認されており、今後さらに繁殖にも利用されるかどうか継続観察を進めていく予定である。



秦野産ヒノキ材で製作した巣箱／巣箱の設置（高さ 7m：ヤマザクラ）／巣箱の設置（高さ 10m：ヒノキ）



樹木プレートのデザイン／樹木プレートの設置／クヌギの樹木プレート

3-2 万城目ゼミナールのプロジェクト

① プロジェクトの概要

新型コロナウイルスの感染拡大のため、2022 年度も NPO 等との協働による学外における大人数でのプロジェクトの実施が見送られることとなった。そのため 2022 年度は、湘南の地域産業として発展してきたみかん農家においてフィールドワークを実施し、農家が抱える課題を検討し、その解決に向けた方策をとりまとめた。その際、NPO のメンバーである経営コンサルタントからビジネスモデル構築のメソッドについて講義していただき、その方法を用いてアイデアを資料にまとめ、学内で報告会を開催した。

② プロジェクトの経過

NPO の支援を受けて、湘南地域のみかん農家を訪問し、地域産業として発展してきた湘南のみかん産業が抱える課題についてヒアリングを行った。その課題を研究室に持ち帰り、NPO のメンバーである経営コンサルタントからの指導・助言も受けながら、湘南のみかん産業の活性化に向けた方策を検討した

③ プロジェクトの成果

万城目研究室の学生が湘南のみかん産業をケーススタディーとした湘南地域産業の課題について検討し、その成果をスライドにまとめ、NPO からの参加も得て、学内で報告会を開催した。



湘南地域のみかん農家におけるフィールドワーク



学内での報告会を終えて

3-3 池村ゼミナールのプロジェクト

池村研究室では春・秋学期に開講した「ゼミナール」と連動を図り、以下のような実践型教育プロジェクトを実施した。2022 年度は新型コロナウイルス感染症も 3 年目を迎え、“ウィズコロナ”の掛け声のもとコロナ前のイベント等も徐々に始動したことで、学生への依頼プロジェクトは増えつつあった。実施にあたってはすべてのプロジェクトに履修生 17 名が参加し、成果物としては学生たちによるデザイン提案・デザイン制作が中心となった。

1) 東海大学関連のプロジェクト

① おべんとう掛け紙のデザイン

コロナ禍において学食が閉鎖される中、学内各所でケータリングカーによるお弁当販売が増えてきたこともあり、一昨年度に実施した伊勢原市の鹿肉カレーパッケージデザインの依頼元である㈱セオゾンより「冷製レモンパスタ」の掛け紙のデザインが依頼された。デザイン提案はゼミ生全員が行い、その中から3名の学生のデザインが採用され販売された。



採用された掛け紙3点

②緊急連絡用ステッカーのデザイン

湘南キャンパスのキャンパスオフィス総務担当より、学内での突然の怪我や病気の際に利用する「緊急連絡専用電話番号」を表示するA4判程度のステッカーのデザインが学生たちに依頼された。デザイン提案はゼミ生全員が行い、その中からユニークなイラストで目を引きやすいデザインが採用され、学内の全教室から共有スペースなどに掲示された。



採用されたステッカーデザイン

③木くずワークショップ

コロナ禍も落ち着き3年ぶりに湘南キャンパスで開催された「TOKAI グローカルフェスタ2022」のプログラムの一つとして、池村研究室は「木くずワークショップ in TOKAI」を出展した。10月22日の会期当日は「人間学2」の授業としてゼミ生全員が参加し、小田原地域の木工産業で排出されるユニークなかたちの木くずを使い、子どもたちが中心となる参加者のワークショップをサポートした。



木くずWSの様子

④環境サステナビリティ研究所ロゴマークデザイン

本学において2022年4月に設置された東海大学環境サステナビリティ研究所 (TRIES) の活動と成果を内外に広く発信していく目的から公募された、研究所のロゴマークデザイン提案をゼミ生全員で行い、その中から1名の学生のデザインが採用され、他1名の学生が審査員特別賞に選ばれた。



採用された TRIES のロゴデザイン

2) 地元イベントのポスターデザインプロジェクト

①神奈川県生涯学習フェア

「第25回大学で学ぼう～生涯学習フェア～」(主催：かながわ大学生涯学習推進協議会／事務局：神奈川県立図書館 広報・生涯学習推進課)のポスターとチラシのデザインが本学の地域連携担当部署に依頼があり、デザイン提案はゼミ生全員が行い1名のデザインが採用された。



採用された
生涯学習
フェアの
ポスター

②第55回伊勢原観光道灌まつり

2019年の開催以降、2年連続で中止であった「伊勢原観光道灌まつり」のポスターを、伊勢原市商工観光課から依頼され、他の地元祭りのポスターデザイン提案と調整の上、ゼミ生8名がデザイン案を提案し、その中から1名の学生の案が採用された。



③第75回秦野たばこ祭

「伊勢原観光道灌まつり」同様、ここ2年間は祭り自体が中止となっていた「秦野たばこ祭」が秦野市観光振興課により計画され、他の地元祭りのポスターデザイン提案と調整の上、ゼミ生5名がデザイン案を提案し、その中から1名の学生の案が採用された。



左上：道灌まつり
ポスター

右上：たばこ祭
ポスター

左下：美・緑なかい
フェスティバル

④美・緑なかいフェスティバル2022

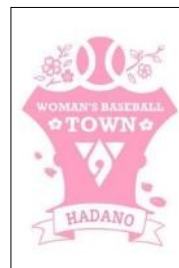
今年度新規に神奈川県央地域にある中井町より「美・緑(みりょく)なかいフェスティバル」のポスターデザインが企画課より依頼があり、他の地元祭りのポスターデザイン提案と調整の上、ゼミ生4名がデザイン

案を提案し、その中から1名の学生の案が採用された。

3) 周辺自治体からデザイン依頼プロジェクト

① 秦野市女子野球タウンロゴデザインプロジェクト

秦野市が力を入れる女子野球タウンのロゴマークが、秦野市スポーツ推進課から依頼され、ゼミ生全員がデザイン提案を行い、その中から1名のデザインが採用された。



採用された女子野球タウンロゴ

② 平塚市「ベジ太プロジェクト」「ベジタマプロジェクト」

平塚市民・大学交流事業の観光・産業推進部会の取り組みとして、市内幼稚園や保育園に配布するベジ太の野菜の種のパッケージデザインと、ベジタマプロジェクトのぬり絵原画、ベジ太マスクデザインをゼミ生全員が提出した。



採用されたベジ太マスクデザイン

③ 大磯二宮漁業協同組合「タマ三郎に妹がいた」プロジェクト

平塚市漁業協同組合の隣の地区にある大磯二宮漁業協同組合より、キャラクター「ひらつかタマ三郎」の妹を学生に提案してほしいとの依頼を受け、ゼミ生全員でプレゼンテーションを行い、組合関係者間の協議の上、「いそのみやタマエ」という名前で、平塚から隣町の大磯二宮地区に嫁いで二人の子どもを育てるかわいいママのキャラクターが登場し、タマ三郎同様、タマエのかぶりものが学生たちの手により制作された。



タマエとタマ三郎

4) その他のプロジェクト

① ラスカ平塚「産学連携ギャラリー作品展示」

平塚駅に隣接する商業施設ラスカ平塚の産学連携型ギャラリーの運営を2022年度も実施した。2022年4月からは「国花」をテーマに、9名のゼミ生がある国の花をモチーフにイラストを展示。また2022年10月からは「窓」をテーマに、8名のゼミ生が窓のある風景を制作した。



ラスカ平塚の「国花」展会場

② 無印良品「MUJIcom TOKAIuni Art&Design」

2022年8月より、ラスカ平塚の2階に出店する無印良品の販売スペースに併設される「Café&Meal MUJI」の飲食スペース内にある壁を利用した学生たちの作品展を開催した。第一弾が4年生4名による1ヶ月ごとに連続展。その後は3年次生4名による1.5月ごとの連続展を開催した。この取り組みは無印良品で販売する商品を利用した作品であり、写真やイラスト、レリーフオブジェなど様々な作品スタイルとなった。



MUJIcom TOKAIuni Art&Design 展

③ 日本土壌肥料学会 100 周年ロゴマークデザイン

教養学部長が所属する日本土壌肥料学会が100周年を迎え、ロゴマークデザインを募集しているとの情報をもらい、ゼミ生全員がデザインを応募した。結果、優秀賞等の次点に数名が選ばれた。



受賞した100周年ロゴデザイン

5) 地域連携プロジェクトの総括

2009年度からスタートした教養学部独自の実践型教育プログラムである「SOHUM プログラム」、また2013年度から本学全体で取り込んだ地域連携活動「To-Collabo プログラム」を活用して取り組んできた池村研究室の地域連携プロジェクトを総括する本『まきこむ・たのしむ・はぐくむ エンタメプロジェクト』（池村明生著／全270頁）を東海教育研究所より発行した。



著書『エンタメプロジェクト』
(池村明生著／東海教育研究所発行)

池村が着任した2007年度から2022年度までの約15年間の取り組みを整理したのもので、地域連携に関心のある教職員・学生、さらに自治体関係者等に読んでもらいたい事例を多数掲載している。

3-4 貴家ゼミナールのプロジェクト

①プロジェクトの概要

プロジェクトの概要：千葉銀行と横浜銀行が将来の地域経済の担い手となる学生の起業家精神の醸成を目的とする「ちばぎん・はまぎん学生ビジコン 2022」に学生がビジネスプランを企画して応募した。

②プロジェクトの経過

専門ゼミナールと連携し、「地域活性化に繋がるビジネスプラン」を検討し、ゴルフ場のサブスクリプション、就活や採用活動のサポートするビジネス、若者の旅行と地域の人手不足解消をマッチングするアプリ等、千葉と横浜地域の特性を検討しビジネスプランを検討した。パワーポイントを作成し二度の授業での発表を経て、最終応募書類の作成に取り組んだ。

③プロジェクトの成果

専門ゼミナールを3つのグループに分け取り組んだ。一つのグループは、神奈川県と千葉県に多いゴルフ場の利用を促進するためラウンドのサブスクリプションの提案をした。会員権制度で運営されるゴルフ場に若者や新しくゴルフを始める人を対象に定額制の導入と割安感を打ち出した。次のグループは、旅行する若者を地域活性化の潤滑油とする「マッチングアプリ」の提案をした。これは、旅行費用を現地の宿泊業等でお手伝いでまかなうもので、アルバイト分を交通費や宿泊費に充当してもらうという仕組みである。もうひとつのグループは、就活中または就活を終了した学生を集めたコミュニティを中心に、学生向けのES添削や面接練習などのサービスを行うビジネスプランを提案した。これは企業側には情報提供の機会を提供するもので、学生を企業に紹介する従来の大手のルートとは異なる企業と学生のマッチングを提案した。また学生の採用活動に苦勞している千葉県や神奈川県の中小企業等に割安の採用活動の空間を提供するものでもある。活動を振り返ると、産業支援、地域活性化の支援、就活や採用支援をターゲットに据え、地域の持続的発展のために必要なものは何かを考え、議論を重ねて理解を深め企画に取り組んだ。マッチングアプリの開発やサブスクリプションの活用等、斬新なアイデアは学生ならではのであった。参加学生9名。

4. おわりに

2022年度は“ウィズコロナ”の掛け声の中で、徐々にコロナ前のプロジェクトも動き出し、また新たな取り組みも増える中、湘南地域ブランドプロジェクトは活況を示していた。各教員のゼミナールと連動した取り組みも学外活動がメインとなり、学生たちは校外での実践型教育プロジェクトに集中することができたようである。

湘南地域ブランドプロジェクトに限らず SOHUM プログラムは、来年度 2023 年度の「人間学2」の授業をもって一定の役割を終えることになる。2009 年度からスタートした SOHUM プログラムは、教養学部におけるオリジナルの教育プログラムであり、この 14 年間に於いて育まれた学外との連携ネットワークなどは今後の新たな学部運営においても価値ある資源となる。2022 年度からスタートした教養学部の学部共通科目では唯一、7・8 セメスターの学生を対象に「プロジェクト研究 A・B」が予定されるが、異なる学科や専門領域を超えた卒業研究をめざす学際教育においては、これまでに培ってきた SOHUM プログラムの資源と同時に、学科を超えて経験した教育プログラムが活かされると信じている。